父母参加の乳幼児健診における小児科医としての実際的対応

横井茂夫[1)]　森田英雄[2)]

［要旨］　母性、父性、育児性について、概説を試みた上で、父親の乳幼児健診参加への方策をたてると共に、実際に父親が健診にきた場合、小児科医としていかに父親に対応すべきか、本研究班のこれまでの研究知見を生かしながら、そのポイントを示した。

見出し語：父親参加の乳幼児健診、育児性、父親への小児科医としての対応

はじめに

わが国はこの30年の経済成長とともに、ライフスタイルも大きく変化した。たとえば女性の社会進出による晩婚化、シングル化が進行すると同時に、住宅事情などによる核家族化も進み、保育所育児も増加した。このような状況の中、小児人口は減少し続け、現在の合計特殊出生率は1.46人と減少した。また学校・塾などの教育費がかさむこともあり、その数少ない子どもを極力大切に育てようとする傾向も生まれた。

高度成長が続く社会にあって、父親になるべき年代の若者たちは、農業などの第一次産業や酒屋さん八百屋さんなどの小規模経営から離れ、サラリーマンとなって朝早く家を出て夜遅く帰り休日も少ない状態で、時間的、空間的、物理的に家庭不在とならざるを得なかった。最近は家庭を大事にするマイホームパパも話題になっているが、まだまだ多いとは言えない。また大きく変わりつつある日本の母親にも、「男は仕事、女は家事育児」という性別役割分担を肯定する意識が以前として高い。女性が職業を持つことを、ほとんど全ての人が認めているが、それでも子どもができたら仕事をやめ、子どもがある程度大きくなったら再就職することを良しとするもので、日本女性の就労パターンがM字型（出産退職、育児終了後再就職）となることがまだまだ多い。このことが0･1･2 歳児を保育所に預けて働く母親に必要以上の心理的負担を与え、育児上何らかのトラブルに遭遇すると、家庭や社会で有形無形の圧力が発生し、両親

1)都立母子保健院小児科　2)高知医科大学小児科

（特に母親）の大きなストレスとなっている。そこで我々の研究班での知見[3]をいかし、育児性の重要さを強調した上で小児科医として健診時にいかに父親に対応するかを述べた。

Ⅰ．母性、父性、育児性

母性とは女性がわが子を守り育てようとする本能的性質であるが、父性にはぴったりの定義は見つからず、育児における父性とは何かを言い当てるのは難しい。団塊世代の父親を境目に、父親の家事・育児の参加度は増加し、食事の手伝いをしたり、乳児健診に子どもを連れてきたりすることも珍しくなくなった。しかし、「母親の育児の楽しさと父親の役割について」の調査では[4]、①育児、子育てを楽しいと感じる母親は、この10年間（1982～1991）で82％から38％に減少している。②母親が育児を楽しいと感じることと父親が家事や育児を手伝う時間、内容とは直接関係しない。③育児について父親と話し合う頻度が低い母親は育児を楽しいと思わず、かつ育児を負担と感じやすい。この問題を解くためには、母親の疲労感の調査にも注目したい。母親自身の疲労感と父親からみた母親の疲労感には大きな落差があり、父親は母親の疲労感を理解していないことがわかる。母親にとって育児は、一日中子どもと一緒にいて絶え間ない授乳とおむつの世話の繰り返しが続き、夜中であってもなかなか休むことはできないものである。病気がちであったり、育児書どうりに育児が進まないストレスも加われば、精神的にも肉体的にも限界となる。家事育児を手伝うことも大切だが母親の話をゆっくり聞き、相談相手になる父親を望んでいるのである。会話することは、母親の精神安定をさそい、育児に充実感をもたらし、育児を楽しいと感じることができるようになるための大切な鍵である。また、子育て・育児を充実し、楽しいと感じる育児性の高い親をつくるためには高校生の育児体験、男子高校生の家庭科の履修、母親学級とともに父親が参加できる両親学級なども行われている。

子どもが小さい乳児期には父性や母性より、子育てが楽しいと感じる育児性のほうが重要であるが、粗大運動が伸び、外遊びが多く動きもダイナミックになる3 歳頃からは父親としての父性を生かすことが望ましい。さらに思春期になれば父性がより重要となり、父親の父性が発揮される可能性は高まることはいうまでもない。子育ての中での父親の役割[5]をまとめると次のようである。

①母親の育児不安に対して、話を聞き相談相手となる母親を支える役割

②母親側の母子密着問題に対して子どもと関わり、母親と違った目で子どもを見守り支える役割

③母親側の母子密着問題に対して母子の共生関係に介入する役割

④子どもが親離れする際に同一化の対象となる役割がある。

家事、育児をよくする父親の中には、上記の父親の役割ができずに、一つの家庭の中に母性化した父親と本当の母親と二人の母親状態となり、母子密着がいっそう強くなり、子

どもが独立（同一化）できないケースもある。

Ⅱ．健診における父親の役割と小児科医の対応[6)]

1)健診へ父親も母子と一緒に来所するように依頼する。

父親の育児性を高めるために、妊娠中の母親学級以外に、父親の参加する両親学級を開いたり、分娩に父親が立合うＬＤＲの設備対応を行う。出産後の母子退院時に、健診の予約を行ない、迎えに来た父親に、健診には母親と一緒に来所するように依頼する。

2)父親が来所する健診での注意

保健所や病院の外来は混雑し、健診が予定時刻より多少遅れても母親は待つことができるが、社会人として約束の時刻を厳しく守っている父親には、たとえそれがやむを得ない事情であっても、不快な感情をひき起こすことが多い。何らかの理由で時刻通りに始められない時には、早目に待ち時間を説明しておく必要がある。父親は母親に比べて、健診のスタッフの顔や名前を覚えていないので、スタッフはネームプレートを付けたり、父親と面談する時に自分から自己紹介したりする気配りが望まれる。

3)父、母の話をよく聴く。

診察時に、母子手帳の母親の記入内容を見たり、親の訴えや心配を聞いて、病的ではない訴えの場合でも、木で鼻を括るような、「心配ない」「問題ない」「やり方が悪い」という対応ではなく、母親の訴えに対して父親の意見を聞き、次に子どもの診察所見を述べて、訴えや不安についての指導を行なう。

正常範囲や病的ではない訴えの場合。例えば、やせている、太っている、小食、大食、偏食、夜泣き、指しゃぶり等に対して、父親、母親自身が乳幼児期にどうであったかを尋ねる。乳幼児期に父親や母親に似ていて，成人になった現在の父母に訴えのような所見は当然ないので安心できる。

有所見や問題がある場合。３パーセントタイル以下の発育、頚定の遅れ、歩かない、言葉の遅れを認めた事例には、○○が遅いと両親に話し、つぎに、それに対する父親の意見を聞く。同じような遅れがあったが現在は全く問題の無い人が親戚の中にいないかを祖父母に尋ねるように話をする。家族歴が存在すれば、正常化する可能性は高くなり、反対に家族歴が無ければ、このことを機会に両親の問題への理解が深まる。次回の健診までの家庭での赤ちゃん体操や言葉を育てる具体的な方法を父親と母親に説明，指導する。

4)父子関係について、父と子どもの遊びから考える。

健診時、「お父さんは、よく遊んでくれますか？」と漠然と尋ねるのではなく、「お父さんとお子さんはどんな遊びをしますか、どんな遊びをすると楽しいですか？」と具体的に尋ねる。子どもの成長に合った遊びが父と子どもの間にできているかどうかが大切である。４か月であやすと声を出して笑う、６か月でタカイタカイ遊び、一歳過ぎからの追いかけっこやくすぐるまねで笑う遊びなどのヤリトリ遊びで注意する点は、父親は、より大

きな刺激で、子どものより大きな笑いや驚きの反応を引き出そうとしがちであるが、非言語的コミュニケーション形成の為には、より小さな刺激で、子どもから少しでも大きな反応を引き出すよう心がけることが大切である。

5)父親の家事育児への参加度について、具体的に尋ねる。

「子どもをお風呂に入れますか」

「ミルクや食事を食べさせますか」

「オムツを取り替えてくれますか」

「ウンチのオムツも取り替えてくれますか」

オムツ替えができていれば、過去の育児参加度のアンケート調査より、父親の家事育児への参加は積極的であると考える。

6)診察の最後に、「ほかに何か聞きたいことがありますか」と尋ねてから、次回の健診の予約の書類を渡す。

7)父親の来所しない場合。診察時、母親に家庭での父と子どもの遊びや父親の家事育児への参加について具体的に聞き、次回の健診に父親も参加するように依頼する。

Ⅲ．イラストや写真に、父親を積極的に入れる。

母親教室、両親教室、育児教室や母子手帳に使用するスライド、イラスト、ビデオに母親でなく、父親が家事育児をしている場面を積極的に使用し、男性の家事アレルギーを少しずつ少なくしていく。たとえば、父親が離乳食を食べさせている、オムツを替えている父親、父親と母親が協力して入浴させる場面などである。

おわりに

乳児健診で発育発達を評価したうえで、母親の育児上の不安や心配に充分に答えることはもちろんのこと、父親との面接を積極的に行うことが育児性を高めることになる。父親との面接は、家庭の中での父親の役割と存在をより強調することになり、父・母・子の関係は安定することが多い。父親との面接の中で家庭としての機能が低下していたり、子どもへの虐待の心配がある場合には、児童相談所を含めた積極的な援助が必要である。

［文献］

3)．川井尚　育児における父親の役割　小児保健研究　51(6) 671-680　1992

4)．森田英雄．倉繁隆信ほか　父親の育児介入の現状　厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」　平成５年度報告書　1993

5)．吉田弘道ほか　子どもの発達における父親の役割と父親への援助に関する研究　厚生省心身障害研究「少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究」　平成５年度報告書　1993

6)．横井茂夫　健診における父親の役割　小児内科　vol.26　no.9　1593-1596　1994

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

[要旨]母性、父性、育児性について、概説を試みた上で、父親の乳幼児健診参加への方策をたてると共に、実際に父親が健診にきた場合、小児科医としていかに父親に対応すべきか、本研究班のこれまでの研究知見を生かしながら、そのポイントを示した。